養鶏場巡回ロボ開発

大豊産業 AIで死骸を検知

養鶏場で死んだ鶏をAI（人工知能）で自動検知するロボットを、高松市の大豊産業が開発した。鳥インフルエンザへの感染による鶏の大量死など鶏舎内の異常の早期発見につなげる。飼育員が一つずつ目視で確認していた作業を自動化することで、人手不足に悩む養鶏場の負担軽減も期待されている。

養鶏業は近年、1戸あたりの飼育羽数が増えている。通常でも毎日のように自然死する鶏が出るため、大規模な養鶏場では、点検に毎日3～4時間かかるという。死んだ鶏の発見が遅れると、卵が腐敗するなど鶏舎内の衛生状態の悪化につながる。

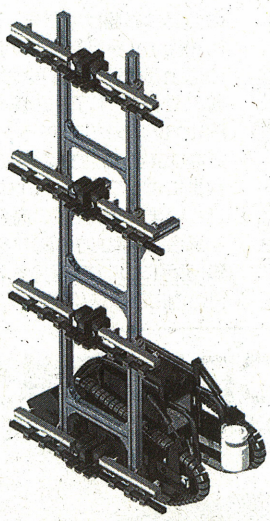
インフラ整備の関連機器を手がける大豊産業は、パック詰め前の鶏卵の汚れを見分けるロボットを開発。養鶏業者から死んだ鶏を判別する装置の開発についても要望されていたという。

2017年に開発に着手し、完成したのが「Robococco（ロボコッコ）」と名付けた高さ2メートル、幅55センチのロボット。計8台のカメラが付いていて、障害物を把握しながら時速1キロで鶏舎内を自動走行する。撮影した画像をAIで分析し、体温を測るサーモカメラと合わせて死んでいる鶏がいるかどうかを判断する。死骸を検知すると、その位置を従業員のスマートフォンなどに通知する仕組みだ。

検出結果はデータとして蓄積され、鶏舎のどの場所で死骸が多いかなどをまとめて確認できるようになる。ロボコッコは試験販売中で、4月頃から本格的に販売を始める予定という。

今後は季節や気温、湿度などのデータとも組み合わせ、死骸の増加といった鶏舎の異常が出にくいよう機能を増やしていきたいという。大豊産業の担当者は「養鶏は担い手の高齢化も進んでいる。AI化で負担軽減などに貢献していきたい」と話している。

（石川友恵）



死んだ鶏をAIで検知するロボット「Robococco」＝大豊産業提供

香川

高松総局
〒760-0018
高松市天神前2-1
☎ 087(833)4141
fax (831)5737
mail:takamatsu@asahi.com

購読のお申し込み
配達お問い合わせ
0120-33-0843
(7:00～21:00)

購読・配達のご用は
高松 (837)2802
(816)5519